

ぼさぼさ工房が

ワインの旅 モンダビとロッポラ

伴 勇貴

ロバート・モンダビ

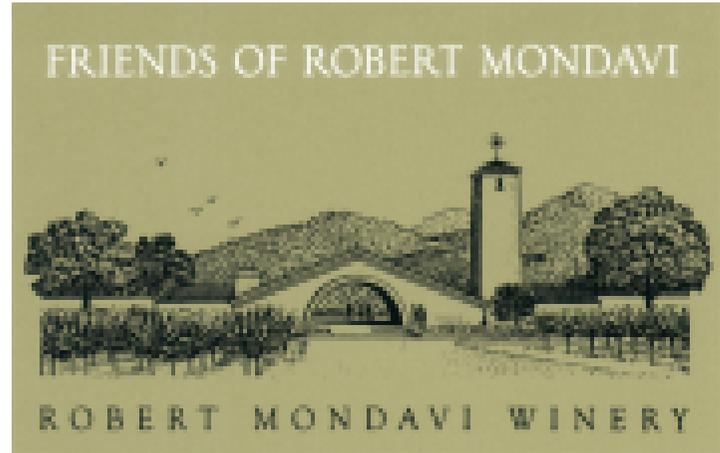
Sさんと、次に訪れたのは、「オーパスワン」の入り口前の道路、二九号を隔てた^{へだ}反対側にある「ロバート・モンダビ・ワインナリー」である。ワイン音痴の僕でも「モンダビ」の名前ぐらいは知っていた。カリフォルニア・ワインという**と必ず出てくる名前**である。「オーパスワン」が美味かつたし、その共同設立者が興したワインナリーということもあつて期待に胸を弾ませる。

二人とも勇んで出かけた。尖塔——これが包装紙のデザインにも採用されている——のある新館は斬新な建物だけれども、それに繋がっている建物は、僕のイメージに合うワインナリーの雰囲気と漂わせている。

「オーパスワン」よりも、多くの観光客で溢れている。普通なら、それだけで顔をしかめるところだが、それだけ人気があるのだろう、それだけ美味しいのだろう、とすべて良い方に考える。その歴史など



を説明する資料館には入らず、一目散に試飲室に向かった。



試飲室も混んでいた。「オーパスワン」のようにうるさいことは言わない。多くの銘柄の試飲をさせてくれた。白ワインもあつたので、珍しく、それも試した。しかし、いずれも、それほどの感激はない。

赤はカベルネ (Cabernet) やメルロー (Merlot)、白はリースリング (Riesling) やシャルドネ (Chardonnay) などのブドウを原料としている。白ワイン用のブドウはカナダのアイスワインの主な原料にもなっているものである。それでも結構な量を飲んだもので少し酔いが回った。それで、まだ行きたいところがあるので、早々に引き上げることにした。

これは一度目の時である。二度目に訪れたときには少し違った。初めから期待していなかったし、それよりも、成功を納め、「ナパバレーの大使」などと言われるまでになった「モンダビ」そのものの歴史に興味があつた。それで試飲はほどほどにしてワイナリーを探索した。展示を見て、ブドウ園にも足を運んだ。しかし、ちよいと目はともかく、やはり「オーパスワン」の方が、ブドウ園の手入れも行き届いているように思えた。

唯一の収穫と言え、無料で会員になり、会員証を手に入れたことぐらいだろう。もつともメールアドレスを記入すれば、ワイン・ニュースを流すという話だったのだけれど、かるく半年は過ぎていのに一通も来ていない。もう少し待っても音沙汰なしだったら、問い合わせをしようと思っている。

なお、「ロバート・モンダビ・ワイナリー」は、一九六六年イタリア移民の息子ロバート・モンダビ氏とその家族が設立したもの。モンダビ家はロバート氏の父の代から家族でワイナリーを営んでいたけれど、ロバート氏は経営上の確執から家業を追われたため、自らワイナリーを設立したのだという。

経営上で対立したというのは、多分、ロバート氏が普通のワイナリーの経営者と比べて遙かにビジネスに長けていたためだと思われる。事実、独立した後、同氏はカリフォルニア・ワインを世界に広める立役者になった。世界各国に輸出する一方、チリやイタリアでも合弁会社を作り、ワイン製造を行う。さらに外食産業や食品産業と提携すると同時に、ワイナリーでのコンサート開催など文化活動にも力を入れ、そして一九九三年には株式上場を果たしたのだという。

ニーバウム・コップラ・エステート・ワイナリー

Sさんと僕は次のワイナリーに急いだ。同じ二九号線に沿ったところにある、「地獄の黙示録」や「ゴッド・ファーザー」などで知られる映画監督のコップラ氏が経営しているワイナリーだ。そこにはコップラ氏が監督した映画で使われた、もろもろの衣装から小道具などが展示されている。なかでも、同氏が監督した映画「タッカー」に出てくる、幻の名車「タッカー」もあるという。Sさんは、その話を始めると、それだけで、もう興奮していた。

「タッカー」——Sさんの話を聞きながら思い出した。第二次大戦の直前、デトロイト郊外の小さな街で、ビッグ3相手に、「夢の車」作りに情熱を燃やした男がいた。より速く、より優雅に美しく、優れた安全性と機能性をもつ理想の自動車を追求する。時速二〇〇キロぐらいで走る流線型の車だ。

その車は「タッカー・トーペード」として実現する。ところがビッグ3は、彼を叩き潰しにかかる。この実際にあった話をルーカスと Coppola が映画化した。夢をかき立てる一方で、現実の社会の凄まじさと暗部を感じさせる映画だった。

後で調べたら一九八八年の映画だった。この「夢」は、結局、潰されたが、その一端は現存する車からうかがえる。約五〇台しか作られなかった、この車が Coppola のワイナリーに展示されているという。

初めて実物を見た。とても五〇年以上前のデザインとは思えない新鮮さが漂っている。改めて、「夢」を持つことの素晴らしさに胸が一杯になる。同時に、こうした「夢」を持ってなくなっている自分にフツと寂しくなった。

これに圧倒されたのか、正直言って、ワインのことはあまり覚えていない。まあ可もなく不可もなしだったと思う。数杯、試飲してワイナリーを後にした。もう、かなりいい気分になっていた。

もつとも昨年秋、「モンダビ」の後、再び訪れた時には、今度こそ、きちんと味を判断し、全体の雰囲気も楽しまなければという気持ちで臨んだ。ほろ酔い加減にはなったものの前回よりは遙かに^{はる}しつかりしている。観光客は増え、従業員も



三倍ぐらいになり、さらにコッポラ・グッズの店が試飲室を占領する。ゆつくりワインの試飲を楽しむ余裕はない。列を作つて、とりあえずコッポラの名前の入ったグラスで試飲する。組み合わせついで二種類を味合うので精一杯だった。

後ろからせつつかれる気分で、かつての熟成所に入る。しかし、並んでいる樽はすべて空。まさに映画のセットである。それでも、それなりの雰囲気させるから、見事としかいえない。デイズニールランドである。

出口にも売店があつた。それを黙つて通過すると、かつてとは見違える景観が飛び込んできた。造園工事と同時にレストラン建設をしているらしい。屋外にテーブルが用意され、そこでワインなどを楽しめるようになっていたが、早晩、これは装いを新たにするのだろう。

ワイナリーを振り返ると、建物は同じだが、景観はまったく別のように見えた。いかにも年代を感じさせるたまたまになってきている。まさに演出である。

そして肝心のワインは、万人受けのする、口当たりの良いメルローが中心だった。まずいとは言わないが、やや物足りなかつた。ワイナリーは綺麗になり、従業員の愛想も良くなり、まるでデイズニールランドのようになっていたのと同じで、ワインもつまらないものになっているように思った。



忘れてしまったワイナリーとレストラン

「オーパスワン」そして「モンドビ」、「コッポラ」。こまでは前回に做って順調に来たのだが、その後は、今回はただけなかった。Sさんと一緒の時は運転手兼ガイドがともかくワイン通だった。それほど有名ではないが、見逃せないワイナリーがいくつかあるといい、二九号線を離れ、小さな趣のあるワイナリーに酔っぱらい二人を案内してくれた。そんな中の一つで二人は食事も楽しんだ。次の写真である。



そこにまた行きたいと思った。名前はまったく覚えてはいないが、写真はあるし、付近の景観などの記憶は残っているのだから、近くに行けば、すぐに思い出さだろうと簡単に考えた。それで出掛けた。

ところが、今度の運転手兼ガイドは、多くの団体客が行くワイナリーとかレストランしか知らなかった。いくら写真を示し、付近の景観のイメージを話しても、どの当たりか見当が付かないという。たしか幅広い二九号線から一本内側の通りを行った。すると写真の美しい風景と洒落たレストランに出会ったなどと懸命に身に説明した。

ところが記憶にある風景はいくら走っても出てこない。下の写真の風景で、記憶しているものとは似ても似つかない。それが延々と続く。うろろうし回つたけれど分からない。

お陰で、ブドウ園の灌漑方法が良く分かった。穴の開いた金属チューブが敷設され、その穴から細い水が五〜十センチぐらいカーブを描いてブドウの木の根本付近に注がれていた。この方法がナパバレーの気候と土壌にもつとも適しているという説明だった。

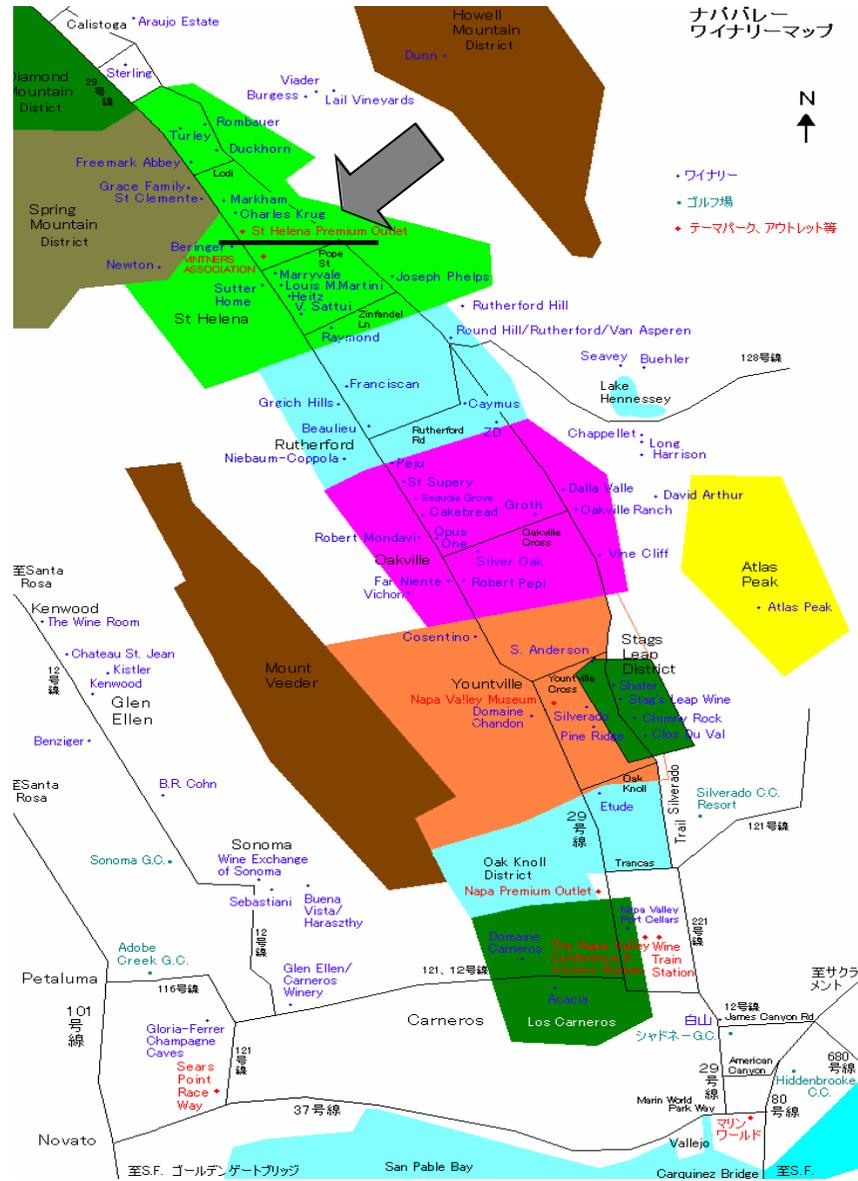
しかし、空腹に耐えられなくなった。Sさんと一緒に回った瀟洒なワイナリーを探すことを諦めた。事前に調べておいてから、また来ようと決意し、運転手兼ガイドが知っている中で、お勧めのレストランに向かうことにした。

なお、日本に戻ってナパバレーの地図を調べたら、間違えた理由が分かった。次のページの地図で、中央の二九号線にそって「コツポラ」に行つたところまでは良いのだが、そこで右折し、二九号線と平行する道路にぶつかったところで、また右折してしまったのがいけなかった。目的地は「コツポラ」からさらに二九号線を真っ直ぐ進み、地図で「黄緑」色に塗られている一帯に入り、そこで右折しなければいけなかった。矢印のところが、写真に写っている、以前、Sさんで行つたワイナリーだった。

さらにナパバレーのホームページ（<http://www.napavintners.com/index.html>）も見つかった。ここにアクセスすると、これよりもっと詳細な地図とワイナリーの説明なども掲載されていた。またナパバレーの隣の谷、「ソノマバレー」のホームページ（<http://www.sonomavalleywine.com>）もあった。ナパほど有名ではないけれ



ど、このワインも美味かったことを思い出した。事前に、しっかり調べ、再度、ソノマバレーを含め、ワイナリー巡りをやろうと改めて決意した。



(http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Oasis/1961/Winery/winery.htm)

今回の運転手兼ガイドが連れて行ったレストランは、懸念していたほど悪い雰囲気のところではなかった。もともとワインは、ワインリストを眺めた美味そうではない。食事だけで飲み物は水にした。ウェイトレスは怪訝(けげん)そうにワインを勧めたが、もう飲み過ぎなので結構だと断った。それでもほろ酔い加減で木陰の椅子に座って、周囲の雰囲気浸っていると、身も心も華(はな)やいである。時が静かに流れた。

帰りには噂に聞いていたワイン列車に出会った。一日一往復。ワインと食事を楽しみながら、ナパバレーのセントヘレナまで行って、戻ってくるのだという。話の種に乗ってみるのも悪くはないと思った。(二〇〇三年夏)

